

**平成 24 年度**

# **不登校フォーラム 記録集**

**「登校どころ」を育む支援**

**～ 登校支援を受ける立場から感じること～**

**日 時 平成 24 年 11 月 4 日 午前 10 時～午後 3 時**

**会 場 京都市教育相談総合センター（こどもパトナ）**

**京都市児童生徒登校支援連携協議会**

**京都市教育委員会**

# 目 次

## 第1部 全体会

パネルディスカッション \_\_\_\_\_ 1

コーディネーター：藤原 勝紀 氏（京都大学名誉教授）

パネリスト：山本 輝栄 氏（京都府臨床心理士会）

久米 功一 氏（京都市立中学校PTA連絡協議会会長）

須崎 貴 氏（京都市立洛風中学校長）

## 第2部 分科会

第1分科会「一から学び考える不登校」 \_\_\_\_\_ 37

講師：桶谷 守 氏（京都教育大学教授）

岩井 秀世 氏（京都市スクールカウンセラースーパーバイザー）

第2分科会「精神医学の観点から見た不登校」 \_\_\_\_\_ 38

講師：森 孝宏 氏（京都教育大学保健管理センター教授）

第3分科会「臨床心理学の観点から見た不登校」 \_\_\_\_\_ 39

講師：濱野 清志 氏（京都文教大学心理臨床センター教授）

第4分科会「フリースクールから見た不登校」 \_\_\_\_\_ 40

講師：鷹羽 良男 氏（フリースクール ほっとハウス代表）

第5分科会「発達障害を支援する立場から見た不登校」 \_\_\_\_\_ 41

講師：村松 陽子 氏（京都市発達障害者支援センター「かがやき」センター長）

第6分科会「若者の“自立”を支援する立場から見た不登校」 \_\_\_\_\_ 42

講師：水野 篤夫 氏（京都市ユースサービス協会事業部長）

## 参 考 資 料

不登校フォーラムの歩み \_\_\_\_\_ 44

〔\*講師の肩書きは、いずれも実施日当時のものです〕

# 全体会

**「登校ごころ」を育む支援**

**～登校支援を受ける立場から感じること～**

## 不登校が問いかけているもの

**藤原氏**：この不登校フォーラムは、不登校の子どものみならず、不登校のお子さんを抱えてご一緒に過ごしておられるご家族、地域の人々、そして何よりも学校の先生方やスクールカウンセラーを志す若い方をはじめ、いろいろな関係者が集い、人と人とが「不登校」という言葉を通じてどのように関わり繋がっていくかということと一緒に考えるために開催されております。こうした趣旨のフォーラムに、たくさんの方々が集っていただき、ありがとうございます。

今年で13回目を迎えますが、不登校に関してこれまで蓄積してきた知見や、もう一步踏み込んだ新たな考えについて提示し、その活かし方について話し合っていたいただく場でもあると思っております。

今、子どもの数が減ったと言われておりますが、不登校の子ども数は持続的に同じような数字を示しております。京都市においても、不登校の子どもが明らかに減ったと言えるかどうかは微妙なところです。こうしたことを考えると、この「不登校」の問題というものは非常に根深く、あるいは非常に持続的に私たちに何かを語りかけていると感じます。ある日、何かが起こって、解決して収束するというような問題とはどうも違うようです。

不登校というのは、子どもたちが継続的に私たち大人に何かを呼びかけていて、「考えておいて」と提示し続けているテーマかなと思います。それは、問題解決という視点から考えると、非常に難しい問題です。それと同時に、もう一步深く考えて参りますと、実は教育、学校、あるいは私たちが今、世代を超えて生きていくということ、豊かな暮らしの本質とは何なのかというようなことを、子どもたちが私たちに問いかけているのかもしれない。こういう生きる力を深く考えるためという積極的な課題提起の意味があるように思います。

## 不登校は目に見えやすいが…

「不登校」とは学校に行かないという「行動」で、目に見えるものです。その他にも、問題行動とされるものには多様なものがあります。その中で数字上一番はっきりしているものが「不登校」だと思います。「不登校」とは欠席行動ですから非常に明確に見え、現在は年度内に30日以上欠席している状態を「不登校」といいます。

通常、いじめの問題をはじめ、なかなか評定が難しいわけですが、不登校だけは非常にはっきりしています。しかし、「分かりやすければ解決するのか？」というとなかなかそうもいきません。例えば体の病気ですと、症状がはっきりしていれば、診断は極めて明確につき、それに合った治療が施されます。また電気製品の故障ですと、その原因が解けると即座に修理可能かどうかの判断も部品の取り替えもできます。ところが、この不登校問題というのは、問題行動ははっきりしているけれども、じゃあどうすればよいかということに簡単には繋がりません。かけがえのない個人、特に心の問題ですから、非常に複雑多様な要因が絡み合った複合的な問題であり、非常に厄介と言えれば厄介な、人間が生きる本質にも関わる問題であります。

## 子ども個々を全体として理解するということ

どうもこの不登校の問題というのは、単一の原因とか、単一の要因によって起こっていて、それが分かればなんとかなるというようなものではなくて、非常に複雑で総合的なテーマだということです。問題行動としてははっきりしているわけですが、それを起こしている子ども自身との繋がりが、簡単には特定できない難しさがあります。

「こういう子だから」とか「こういうことを考えたから」とか「現状が嫌だから」とかいうような、単純に一つ一つの原因を探っても、全部当たっているといえれば当たっているし、全部当たっていないと

いえば当たっていないというようなことになります。不登校の子どもたちに関わっている方は、様々な形でここが問題だと思って一生懸命取り組んだのに、肝心の子どもは全然学校に行かないとかいうようなことをよく経験されていると思います。そういう意味で、関わっている側も、「子どもがこう言ったから、そのとおり一生懸命解決に向けて努力したのに、結局学校へ行けないではないか」というふうに、苛々して、くたびれてきて、腹が立ってくることになります。最初は良かれと思って子どもに一生懸命関わっているのですが、いつの間にか子どもの全容を掴んだ上で登校支援に結びつくような関わりを続けていくことがなかなか難しくなってくる。

すると、今度は子どもの方も次第に「そんなんならもういいこと聞かん」とか、「もう話せん」とかいう態度になります。もうこちらの方も、子どもが「何かをしてくれ」と言っても受け入れないとかいうことになって、一生懸命皆が良かれと思って頑張っているのにマイナスの方向に向ってしまい、それが進んで昼夜逆転して、もう親とも会わないとか、先生とも会わないという人間関係の悪循環が生じやすい。不登校とは、このように根気強い人間関係力が問われる難しいテーマであると思います。厳しく言えば、不登校は人間関係や人との関わりを通じて作られたり長期化したりするものであると言えるでしょう。

今までも言われてきたわけですが、総合すると不登校というのは問題行動そのものではなく、子どもという人間の全体に対し一体どう考えどう関わったらよいかということを生懸命考えさせてくれるテーマであると思います。つまり、外見上の行動自体ではなくてそれを行っている子どもという人間をどう考え、どう私たちは関わっていき、理解したらよいかということを考えていくテーマであり、これは人間理解と人間関係という生涯学習のテーマではないかと思います。人間そのものというのはそもそも複雑で、総合的です。今日皆さんがここに出席行動されているのも、一つだけの要因

ではなくいろいろなことを総合して今日座っておられると思います。不登校の場合も同じで、いろいろな要因が絡みながら、総合して不登校という状態を生きているのだと考える。そういう人間を理解する、子どもを理解するということをもう一回考えてみたらどうかということです。

人間ということを考えてなると、行動という目に見えるものだけではなくて、あるいは言葉とかいうそういうものだけではなくて、目に見えない心ということはどうしても考えていかなければならないのです。そういう内面的な心、あるいは主観的な心ということはどう考えていくかということを考えないと、このテーマは決着がつかないということになります。

しかしながら、皆さんご経験のとおり、心ということをおある程度分かって、あるいは心の中で思っても、実際に行動に結びつくかどうかということとは必ずしもイコールではないのですね。「学校に行こう」と決意したら翌日から行けるかということとそう単純にはいきません。皆さん方も「明日は休もう」と決意したら学校や職場を休めるかということ、そうはいかないですね。翌日になったら何となく行かなければならないような気になって行くというようなことがあると思います。なかなか「心」ということと「行動」というものはイコールになり難いものです。言行不一致ということですね。ですから、「心」と「身体」を繋ぐことが必要になります。

#### 「繋がり」から「信頼関係」へと一歩深める

今日、パネリストの皆さんにお話いただくのは、震災から1年半少々過ぎいろんな形でキーワードになっている「繋ぐ」とか「絆」という人と人のつながりに関することになるかと思います。「ネットワークのなかで皆で考えていこう」ということや「情報を共有する」というのも「繋ぐ」ということだと思えます。あるいは今日のフォーラムのようなかたちでお集まりいただくのも「繋ぐ」の一



つだと思います。このように「繋ぐ」ということを今キーワードにしているわけですが、学校というのは子どもたちが出席していると、形式上は繋がっているわけですね。しかし繋がっている中から“いじめ”というものが

起こっている。と考えますと、繋がっていないところを「繋ぐ」ことは大切ですが、繋がっただけで上手くいくわけではない、ということですよ。不登校の子どもというのは、一回学校に行って学校に繋がっていたんです。かつて繋がったんだけど、そこから多くの子どもが不登校になっているわけですね。そう考えますと、「繋ぐ」というだけでは「絆」に結びつかない。この点をどうクリアするかということが、私たちのこれから深めていくテーマではないかと思います。

今日そういう意味で、単なる情報の共有とか集まりという形での繋がりを越えて、どのようにこれから、もう一步深く繋がったなかで、本当に有効に、共に生き、共に自分自身を円滑に発展させていく力にしていくか、つまり繋がりを通じて真の生きる力を得ていくのはどうしたらよいのかということを考えることが大切です。支援に当たる人は、何のために繋ぐのだろうという考えをもう一つ深めなければいけません。ただ繋がればよいということではないと思います。そこでちょっと勇気を持って申し上げますが、「信頼心」あるいは「信頼関係づくり」がとても重要だと思います。信頼できる心を育てていくために私たちは「繋がる」ということをどう活かしていくか。つまり、お互いに信頼され合う、信頼し合う心がどのようにして育まれていくのかということを考える場が繋がった場で



はないかと思えます。

「信頼関係があれば」という言葉が、家族でも学校でも、いろんな問題が起こった時に言われます。しかし「あれば」では物事は解決しません。関わればすぐわかることですがけれども、信頼関係がある子にはうまくいくのですね。しかしながら実際には一緒に家族が暮らしていても、「信頼をどう回復していくか」「信頼をどう築いていくか」というのが一番のテーマでありまして、信頼関係が回復してくればほとんどの言葉や技術が全部生きてきますよね。安心して「学校に行け」とも言うことができるわけですね。しかしながら、信頼関係がなければどんなに正しいことを言ったってほとんど機能しないし、マイナスになってくる。そう考えると、ポイントは支援の基盤である人間関係が信頼関係のもとにあるかどうか、ということです。つまり「繋がる」中で「信頼できる心」というのは、どのようにしたら育まれてくるのか。この13回目のフォーラムが、こういうところを考えるきっかけになればと願っております。

#### パネルディスカッション

**藤原氏**：不登校の子どもたちには会うだけでも大変で会ってもなかなか繋がるのが難しいものです。そこから本当に有効な人たちで「繋がった」「繋がってよかったなあ」って思えるような人間関係を形成していくことに日夜腐心しておられるスクールカウンセラーの立場からお話いただこうと思います。よろしく願いいたします。

**山本氏**：私は現在京都府でスクールカウンセラーをしています山本と申します。よろしく願いいたします。現在は子どもたちや家庭を支援する立場にあるのですがけれども、私自身も不登校の経験があります。ですので、今回この不登校フォーラムにおいて、実際に支援を受けた立場からその時に感じていたこと、そして現在支援に携わっ

ている者として今大切にしていることを、両方の視点からお話したいと思っています。

私自身の不登校体験についてなのですが、私自身は高校生の時に一時期学校に行けなくなりました。学校とか先生とか友人とかが嫌なわけではありませんでした。学校自体は、どちらかと言えば“楽しい場”というように捉えていました。学校に行かなくなっからは、学校の先生とか友人とか家族とは一切話さない環境に少しの間いました。その時には再登校するという意識もなかったですし、その日とかその時自分が何をしたいかということで日々行動していたように思います。支援を受けた側からその時感じていたこととしては、心の奥底ではすごく空虚感があったなあというように今から思えば感じます。自分自身の所属感のなさ、また居場所のなさ。そしてそれに伴う孤独感というものが、当時は自分自身ではそんなに意識していなかったですけれども、心の奥底ではすごく強かったというように思います。

しかし、高校生ということもあってそれらの問題とか自分の思いを自分一人では向き合えずに日々のいろいろな行動で紛らわすという日々を送っていました。私自身が不登校状態にあった時、学校の先生にお会いすることはなかったですけれども、学校から毎日連絡ノートを送っていただきました。そこにはクラスメイトの友人から私が登校しないということに関して心配しているというようなメッセージが毎日書かれていました。両親からの言葉がけもあったのですけれども、その時はかなり一方通行で、それに関して私が返すということはありませんでした。また、父が相談していた父の友人、私からすると面識がない方ですけれども、その方からすごく長文の手紙をいただいたということもあって、メッセージをとてもなくさんもらっていたなというように思います。しかし、その時の自分はそのようなあたたかい言葉や、やさしい言葉に対して見て見ぬふりをしていた感じがします。というのも、学校に行けていないと

いう状況で、先ほど申し上げた空虚感とか孤独感のなさ、先の展望の見えなさについて考える、向き合うということは、とても辛いことでした。また、不登校になったきっかけというのも自分自身では分からず、この先現実的にどうしていけばいいかということも分からなかった。なので、いろんなメッセージがありましたが、それに対して私自身がその時返す心の余裕がなかったというように感じています。

なぜ学校に行けないのか、なぜ学校に行かないのか。先ほど藤原先生もおっしゃったように、行動としては登校か不登校かという2つしか選択肢がないのですが、登校しないということが問題なのではなくて、それがやっぱり自分が生きていく上でのすごく大きなつまずきであったことが重要だと感じています。表現を変えれば、学校に行かないということはそれまでしてこなかった初めての自己主張であり、大きな自己決定であり、自己表現であったというように考えています。

義務教育ではない高校生の時に不登校だったので、出席日数であったりとかテストの問題であったりとかがあり、最終的には再登校を始めました。それまでいろんなメッセージが届いていてそれに返す余裕はなかったのですが、そのメッセージがすごく心の中にどんどん蓄積されていたというか、自分には学校にも地域にも居場所があるんだという感覚は少しずつですが自分の心の中で育っていたと思います。ただ、再登校ということでかなり久しぶりに学校の門をくぐる時、また教室に足を踏み入れる時とても緊張していたなと思います。しかし、先生もクラスメイトも私に対して腫れ物に触るというような態度は一切なかったしですし、自然に受け入れてくれました。やっぱり自分の居場所はここにもあるんだということがとても嬉しかったので、スムーズに教室の方には戻ることができました。担任の先生は女性の先生だったんですけども、「どうして学校休んだのか」というふうに詳しく聞いてくることはなくて、し

かしいつも私にすごくあたたかい視線を送り続けてくださいました。今でも、その先生が心配して見てくださっている表情は、すごく私の頭の中に残っています。また、そんなに詳しく聞いてくださることはなかったのですが、私が辛そうにしている時には、言葉は少なめかもしれませんが「大丈夫か？」というように声をかけてくださった。こうした面ですごく関心を向けてくださっていると感じていました。

私自身は、登校していない期間よりも、学校に再登校してからのほうがしんどかったと感じました。登校したからといって、自分自身の心がすっかり回復したわけではないです。自分のつまずき、または自分の中のひっかかりというものをどのように自分の中で整理をしていくかという大きな課題が残されました。その時は高校3年生でしたが、両親の勧めでこの京都市教育委員会の相談室に1年間半通い続けました。そこでのカウンセラーとの出会いってというのは、やっぱり今までの人生にはない出会いでした。毎週同じ時間に自分を待ってくれる人がいる。自分に関心を持ってくれる人がいる。私自身すごく行動化というか、親への反発心もありましたし、いろんな行動を起こしてきましたけれども、カウンセリングは評価されることも否定されることもなく自分自身という存在をありのまま受け入れてもらえる体験だったと思います。ただ実際、カウンセリングの中では自分自身の不登校ということに関してはほとんどしゃべらなかつたという記憶があります。高校を卒業して心理学の大学に進学しましたが、大学でも学生相談のカウンセリングを2年間受けました。先ほど、登校したからといって自分自身の心もすっかり回復したわけではないと申し上げましたが、大学に入ってから、周りの人たちにすごく迷惑をかけた罪悪感とか、多くのリスクを背負っていた自分を再登校することで押し込めたように感じられて、すごく辛さが残っていました。そんな中、学生相談のカウンセラーの方とお会いしているときに、すごく救われた言葉があります。今

でもすごく大切に心の中にしまっているのですけれども、「今のあなたは高校生の頃と違ってだいぶ心が成長している。でも、その時の自分っていうのは自分なりに精一杯もがいてその時の自分なりに精一杯頑張っていた。なので、今のあなた自身がその時の自分自身を認めてあげないと、その時の自分自身が可哀想だっというように感じる」というお話をいただきました。学校に行けなかった自分、できなかった自分、周りに迷惑をかけた自分を誰かに受け入れて欲しいという想いがすごく大学に入ってからもあったのですが、そのカウンセラーの言葉を受けて「自分が自分自身のことを受け入れていない」ということにその時初めて気付きました。なので、何度も申し上げますけれども、登校したからといって解決したわけじゃない、また数年経ってようやく心の中を整理する準備ができたということなんです。

これらは自分の体験からお話させていただいたことですが、現在スクールカウンセラーとして子どもに関わっていく中で、支援する側の立場から大切にしていることを3つ挙げさせていただきたいと思います。

1つ目は、先ほどから出ていますけれども、登校、不登校というだけで子どもを見ないということを心掛けています。私も高校生の時にカウンセラーに出会いましたが、すんなりそこに繋がったわけではなく、そこに出会うまでは多くの辛さや葛藤がありました。なので、私自身カウンセラーとしてお子さんにお会いする機会が多いのですが、その子自身もすんなり私との出会いが合ったわけではなくて、出会うまでにすごく大きな葛藤を抱えてきたのだと思います。子どもの場合は不登校と言われますが、大人になっても人生における大小様々なつまづきはたくさんあると思います。不登校になったきっかけとか要因というのは、子どもそれぞれに違うと思いますし、また複雑に絡み合っていると思います。今の状態は学生相談のカウンセラーに言っていたように、その子がたくさんのお悩み

んでもがいて、自分なりに頑張った結果であるということ。学校に行けないという子どもを「悪いことなんだ」ということではなくて「行けていなくても大切な存在なんだ」と認めることがまず1つ目です。

2つ目は、環境を整えて準備をし続けることです。「待つ」ということがすごくよく言われると思いますが、ただ単に待っているのではなくて「あたたかいメッセージ」を送り続けることが大切なのではないかと思います。それに対して子どもから直接返ってくることはむしろ稀ですが、しかしこの「あたたかいメッセージ」というのは、家族とかその子どもの心にはちゃんと蓄積されているということ、我々大人が信じる必要があると思います。

3つ目には、家庭と学校、関係機関、医療や相談機関、地域が同じ目線で連携をするということ。「どうしてこうなったのか？」とか「原因は何なのか？」ということを考えることは「誰が悪いんだ」「何が間違っていたんだ」という考えに結びつくことが多いように感じます。確かに、明確な理由があるお子さんもいるとは思いますが、「学校が悪い」「先生の対応が悪い」「養育環境が悪い」というように、いろんなことを決めつけてその原因を解消しようと対処し、それでも状況が動かないと最終的には「本人の怠け」「本人の課題だ」というように結論づけられることが多いと思います。

「連携」という言葉もよく使われるんですけども、言葉にすると簡単ですが、どう連携するべきか常に私自身は考えて迷っています。それぞれ何が



足りなかったっていうようにマイナス要因ばかりを探るのではなく、その子が少しでも心の回復をするという方向を向いているということではみんな同じだという共通認識から、それぞれ何ができるのかというプラスの視点でそれぞれが役割を担い、まとめ、対等な目線で連携していくというのが基本的に大事なかなと思います。

最後になりますが、私自身の不登校経験は子どもを理解しようとする上で、促進にもなるし妨害にもなると感じています。自分自身も経験したからといって分かったような気持ちになると、子ども自身を決めつけることにも繋がりますし、本当にその子が表現したいことを見失うと感ずることが最近あります。一見、不登校の要因やきっかけは違いますし、皆さんそれぞれ性格も違うんですけども、そういったところにも“共通点”というのを見出すことは非常に大事だと感じてはいます。でも私自身と不登校経験とまったく同じことを体験した子どもは少ない、もしくはいないように、その子どもの声を聞いて息の長い支援をし続けていく、学校に行けないということだけじゃなくて本当に生涯にわたってその子自身の成長として見ていくことが必要だな、大切だなと感じています。ありがとうございます。

**藤原氏**：ありがとうございます。大事なことを言っていただきました。

「長い目で見ましょう」という言葉がありますが、改めて「長い目で見ると」という意味に新しい視点をいただいたのではないかと思います。不登校をしている姿ではなく、不登校という行動が解決したように見えても、実はずっとその後持続している心の世界や生きている世界があるというところに、「長い目で見たい」という言葉の新しい意味を吹き込んでもらったと思います。ありがとうございます。

もう1つは、今回のテーマにしております、ユーザーというか支

援を受ける側の方が、どのように考えているか、感じているかという視点から、非常に大切なお話をいただいたと思います。私たちは“体験”をすごく聞きたがるし、聞きたいものであります。私みたいに抽象的な話でなくて具体的な話を聞かせろという声も多くあります。しかし彼女が言ってくださったように同じ例はありませんので、聞く側の方はそれをどのように自分の身に照らして応用するかという「聞き方の力」というものがあるわけです。

もう1つ非常に大事な点は、ご自分の体験がプラスにもマイナスにも機能するという話です。私たちはしばしば「情報を共有しよう」ということで子どもの実態や本音のところを聞きたがりますね。しかし、聞いた以上は責任があります。聞くのにはやっぱり「資格」と「力」がいるということをここで申し上げておいた方がいいと感じます。カウンセラーとして本当に相手のお話を伺い、本音をしゃべってもらえらばもらうほど、こちらの方も責任重大になるんだという話をまた聞かせていただいたらありがたいと思います。

「より長い目で見ると」という話がでましたが、特にご家族や親の立場からすれば子どもが学校に行こうが行くまいと一緒に暮らすわけですから、当然ずっと長い目で見守るという観点になると思います。

PTAの観点、親の観点から子どもについての眼差しをお話いただけたらと思います。

**久米氏**：改めましておはようございます。先ほどご紹介いただきましたが、京都市中学校 PTA 連絡協議会の会長をさせていただいています。また、伏見区にあります向島東中学校で PTA 会長を5年目させていただいております久米と申します。よろしく願いいたします。

実は、PTAの会長をするきっかけが子どもの不登校だったんです。私は子どもが3人います。みんな女の子で、真ん中の子どもが小学



校3年生の頃からときどき学校に行かなくなる日がありました。口癖のように「頭いたい」「しんどい」「お腹いたい」と言っていました。1日休んで2日休んでということを繰り返しました。3年生、4年生のときには、長期的な休みということにはなかったのですが、やはり欠席日数が年間で20日であったり30日であったりということでした。

小学校6年生になりまして、修学旅行を前にして学校に行けなくなりました。修学旅行がプレッシャーになったのか分らないですが、全く行けなくなりました。小学校6年生ですので、今後どうするか心配はありました。でも私は、この子が小学校4年生の時に「本当に不登校なんだ」ということを実感して、考えていた判断基準がありました。まず家を出られるか出られないかということと、自殺しないかどうかということの2つです。“ひきこもり”という部分に関してはまずないなと自分も妻も思いました。家が団地で、子どもの部屋には鍵はかからないからです。布団かなんかにもぐりこんでも、ひきこもりは絶対ないから安心だという話はしていました。次に、子どもが外に出られるかどうか、人と接することができるかどうかです。小学校4年生の時に子どもに「お前は何かしたいのか」という話をしていたら「うーん」と考えるんですね。何を考えるか、何をしてもよいかまずわからないと言うのです。

「学校はどう？」という話は一切言っていない。「学校で何かあったのか？」とか「友達と何かあったのか？」ということについては、私は一切触れなかったんです。そのことについては家内が全部娘に聞いていて、私は家内から聞いて知っていたからです。実は友人関係がきっかけのようでした。今の子どもというのは不思議なもので、4人の友人関係が2+2にならず、3+1になったということです。“いじめ”ではないかと思うのですが、そうした友達関係の不備というところから一人孤独になってきたそうです。

この子に何をさせようかなあと考えて、スポーツは全然できない

子なのでスポーツで走らせるわけにもいかず、「よし、勉強しかないな」と思いました。そこで、小学校4年生の2学期から「塾に行けるか?」という話をしました。「行く」という返事だったので、翌日から塾に行くことになりました。

これで「この子はひきこもりではないな」「外には行けるな」と自分の中で確信をしたものですから、「もう少し様子を見てみようか」と思いました。小学校ですから、学校に行かなくても勉強ということに関してはそれなりにできることはあると正直ちょっと安心しました。その中で家内が「どうしよう。学校に相談しようかなあ」とか「どうしたらいいのだろう」と心配するものですから、私はたった一言、「アホなことを言うなって。来年の今頃にこんな悩みはなくなっている。どうにかなるだろう。心配するな」と言いました。

実は、小学校4年生の時に家内が朝早くパートに行くようになっていました。調理補助の仕事で、朝の5時くらいから行くので、朝に子どもが学校へ行く時にお母さんが家にいない状態でした。私も当然仕事に行くものですから、登校時に見送りがないことで、相当子どもの中では寂しさがあつたのかなあと思います。たまたま下の子が1年生に入学したこともあり、ちょっとは学校へ引っ張られた部分はあつたのですが、やはり自分自身の教室の中で、孤立、孤独がどんどん増していったのかなと思いました。

そこで家内が「学校の先生に相談しよう」と言い出したのですが、私は反対しました。なぜかというところ、「この子は多分、他の人たちに相談されると嫌がるだろう」と思っていたし、またこれは先生に相談することではないなというようにも思いました。ただ、先生にお話はさせてもらいました。相談をすることによって、先生が家庭訪問で来られたり、いろんなご苦勞をいただいたりとなると、逆にそれがこの子にとってはどうなのかなあと考えたので、学校には「休ませてもらいます」ということだけしか連絡しませんでした。

不登校であったり、友達関係の悩みであったりということは一切学校には言わずにいました。そのうち、不登校が長期化してきたので、家内に「パートを辞めてくれ」と言いました。「とりあえず悪いけど、この子に対して1日面倒見てくれないか。面倒というか、家にいて見てくれないか」と頼みました。ただ、家内にとって、家に子どもがいる中で“逃げ場”というものが職場だったのですが、仕事を辞めることでこの子と24時間どっぷりいなくてはならなくなり、本当にその時苦しい思いをしただろうなと思います。

徐々に学年が上がって小学校6年生の時、先ほども言いましたように修学旅行に“行けない”という状況になりました。塾にはずっと行っているのに、学校の勉強に対しては問題ないと思っていたのですが、親自身にも子どもが学校に行けないというプレッシャーと、「本当に大丈夫なのかなあ」という不安はありました。私が勝手に「来年の今頃そんな悩みあるか」とは言いましたけれども、違う悩みがどんどん、どんどん出てきて逆に深くなっているのではないかなんて、実は不安にもなっていたのです。しかし、子どもはいろいろな話をして、家の用事もして、たまには外にも出て、買い物も行ってということもありましたから、それを支えにずっと過ごしていた部分はありました。ずっと休んでいたわけではなくて、ポンと学校に行く日もあれば休む日、ポンと学校行けばまた休む日。1日行けば3日休んで、3日行ったら1週間休んでということの繰り返しがありました。

そのとき、上の娘は中学校3年生でしたが、家内がPTAの学級委員長という立派な役職をいただきました。そこで、どんな中学校か1度覗きに行ってみようということになりました。私自身も中学校に対しても興味がありましたので、PTAの学級委員長を1年させていただいて、翌年にPTA会長のお話をいただきました。当然悩んではいましたが、真ん中の子が中学校に入るに当たって、わが子のことを見たいということもあり、PTA会長をさせていただきまし

た。中学校への入学時、普通に入学式に子どもが出て、学校にも登校するようになりました。「あーやれやれ」いうように思ってたんですけども、1年生の3学期になるとやはりエネルギーがないということでもた不登校気味になりました。「うーん、どうしようかなあ」と思いましたが、ただよく考えたら6年生の時のことを思ったらましか、4年生の時のことを思ったら辛くないかと思いました。これは慣れですよ。もう親がだんだん慣れてきて、余裕が出てきて、笑って済ませるような状態です。下の子がいつもおちやらけしながら「また休んでるのー？」と言ったら、上の子が「そう、また休んでる。暗い顔してー」と笑いながら、真ん中の子を見ていたような状態でした。本当に「暗いな」というときもあつたんですけども、それでも継続して休みながらでも学校に行っていました。

その後進級して、2年生になりました。2年生の途中に子どもが盲腸炎になりました。これはちょっと気をつけておかないといけないと思うんですが、子どもが口癖のように「お腹が痛い」とか「頭が痛い」とか「しんどい」と言っている時に、本当の病気になった時、親は気がつきにくいということがあります。「またお腹痛いとか言っている」と思いながらも、夜間救急病院に連れて行ったんですね。「ただ単に腹痛か」と思っていたら、お医者さんに「いやあ、久米さんちょっと入院ですわ」「盲腸炎になっているからすぐ入院ですよ」と言われたんです。驚いてすぐに家内に電話を入れました。

真ん中の子は先ほども言いましたように、友達関係をずっと引っ張っていた。孤独感があつたとのことでした。中学校3年生のクラス発表がある始業式の日学校を休んだんですが、その翌日に担任の先生が「出てこなあかん！」というこの一言で引っ張っていたいたんです。その先生は、吹奏楽部の顧問をされていた女性の方で、「出てこなあかんで！」とパーンと引っ張られました。信頼関係や繋がりの大切さのお話がさきほどあつたと思いますが、この先生に後ろから背中をパーンと押していただいたことによって、この子は

「この先生なら大丈夫」という安心感を持てたのかなと思いました。

そこから学校へ行き始めたのですが、ここで親として最大の山と考えたのが修学旅行なのです。また修学旅行かと思われるでしょうが、小学校6年生の時に行っていないということもありましたので、「行かないだろうなあ」と思っておりました。あるとき、子どもに「修学旅行行くのか？」と尋ねたら、「行く」と言うんですね。「友だちがいなのに本当に行けるのか」と思いながら「大丈夫なのか？」と尋ねたところ、「うん、大丈夫」と。「本当に行くの？」と更に尋ねたら、「行く」と。実際に、修学旅行に行きました。行き先は東京ディズニーランドです。帰ってきて、デジカメで撮った写真の枚数を見ると、たったの4枚です。先生といっしょに写っている写真、東京タワーを下から写している写真、ミッキーマウスの写真が2枚。そのたった4枚しかなかったんです。でも、親としては一つの山を越したかなと安心しました。「これで大丈夫かな」と。

実はその前から私は、真ん中の子どもが学校から帰ってきた時に、口癖のように「今日嫌なことあったか？」と聞いていました。「今日何かあったか？」と聞いても、絶対しゃべらないと思いましたので、「今日何か嫌なことあったか？」「誰かともめたか？」と尋ねることにしていたのです。初めは一切しゃべらないんですね。途中から「ない」って言い出すんです。私は、それに対して「ないのかー。うん、よかった、よかった」と言います。それだけなんです。「ない」という一言だけでもしゃべれば、もう何があっても大丈夫という感じがしました。PTAの会長もその時点で3年やっていますので、学校の雰囲気は知っていますし、中の様子もある程度分かっています。ただ、子どもの友だち関係については一切分からない中で、子どもから聞く情報だけしか知ることはできませんでしたが、「ない」ってという一言を聞くことによってすごく助かったかなあというように思いました。

その後の10月ぐらいに宝塚歌劇団の舞台を見に行きました。家

内が宝塚歌劇団が大好きで、なにげなく「宝塚を見に行こうか」という話になったんです。娘3人と家内とで行ってきたのですが、帰ってきてから真ん中の子の気持ちの中にちょっと変化があったようでした。一番下の子は「あんなしょうもないもの見るかー」「あんな女が男みたいなの嫌」というようなことをワーワー言っていました。真ん中の子は何か共鳴した部分があったようで、「自分の中でやりたいことが出てきた」と言い出したのです。

真ん中の子は今、高校生ですが、宝塚を見たことによって舞台の部員になりたいと言って、あるプロダクションに、毎週土曜日、大阪まで通っています。ここで一つ嬉しいなあと思ったのですが、先日、真ん中の娘が通学途中で自転車がパンクしたということで、家内に電話してきました。「迎えにきて」とのことだったので、私は観月橋まで迎えに行き、子どもを乗せて学校まで送ったのですが、その途中で「自転車がパンクしたのなら、今日は学校休んだらよかったのに」と言うと、「パパ、実は高校1年から今日まで1日も欠席ないの。無遅刻、無欠席なのよ。ここで休んだら、前と一緒にになってしまうから」と言われました。本当に、いつ何時また不登校になるか分かりませんが、ただ見ていけばどうにかなる、自分が笑っていればいいと思いました。これを苦と思うか、楽と思うか。私は「いい経験させてもらったな」と思います。こうした経験がなければ、今ここに立っていません。本当に自分の経験であるから、何を聞かれても恐くはないんです。

子どもは目標や夢というものができてくれば、ものすごく力強く生きる力というのが培われていくんだなあと思います。周りがいくら言ったところで、どうにも変わらないことが多いですが、親がその子どもの生き方に向き合えたり、子どもが自分の夢を見つけたりすることができれば、本当に子どもってこんなに変わってくれるということを切実に実感しています。いつ何時どうなるかわかりませんが、今ここでこうやって話せる気持ちになって、自分の中でよ

い勉強をさせていただいたと思っています。本当に大変な部分がこれからまだまだあると思いますけども、連携して話し合いの中で一緒に進めていきたいなあと思いますし、もし何かあったら、私で相談にのれるようなことがあれば、またいろんな部分でお声がけいただけたらと思っています。本当に長時間ありがとうございます。またこれからもよろしく願いいたします。ありがとうございました。

**藤原氏**：ありがとうございました。子どもが不登校とか不登校でないとか、成績がよいとか悪いとか、そんな話とは違って、親として一生懸命お話をいただいたような気がします。内容としては明るい話だったかどうかは分かりませんが、なんだか面白そうな感じとか、子どもを語る語り口の迫力とか、その辺のところはどこから生まれるのかなあという感じがすごくありましたね。ありがとうございました。

さて、学校は何のためにあるのかということや、学校の教員としてやっぱり学校は必要で、子どもに来てもらわないといけないということについてです。先ほどのお話じゃありませんけど「出てこなあかん」ということですね。お二人に共通していたのは、登校とか学校の話は、不登校の子どもはしないということですね。表の話題として学校へ行くとか行かないという話はないまま進むということですね。いわゆる“登校刺激”という話とはちょっと違って、そういう話題とは違うところで結構進んでいくものですよ、というのは共通していたような気がします。しかし学校としては、そういう訳にはいかないところもありますよね。ところでこの不登校フォーラムも、無関係じゃなかったと思うのですが、このパトナと同じ敷地に、全国で先駆けとなった公立の中学校として洛風中学校が生まれ、不登校の経験をした子どもたちが胸を張って学籍をこの中学校に置いています。今は更に洛友中学校という同様の趣旨の公立中学校も設置されています。その構想段階からずっと携わっておられる

須崎校長にお話をいただきましょう。

**須崎氏**：はい、改めましておはようございます。洛風中学校で校長を務めております須崎と申します。このパトナホールの匂いや空気を感じますと、平成 16 年に開校して最初の卒業式をここであげた時のことをいまだに思い出します。ちょうどアテネオリンピックの時に開校致しまして、今年はロンドンオリンピックが開催されますので、開校から 8 年経過したことになります。ここ数年、毎年 10 月の創立記念行事の時に卒業生を招いて、自分が中学校の時どういう思いでいたか、あるいは不登校の時どういう気持ちであったか、あるいは卒業してから自分の進路をどういうふうに考えていったかということをして今の洛風中学校の生徒の前で話してもらっています。

つい先日も、高校 3 年生の卒業生に来て話をしてもらいました。彼は今、全日制の 1000 人くらいいる学校で生徒会長をしているということで、それだけでも大変だなあと思います。先ほど卒業式の話をしていましたが、その彼は卒業式の時に答辞を務めてくれた生徒でした。その一部を少し紹介したいと思います。

“あつと言う間に終わってしまった中学校生活で、僕たちは皆といろいろなことに挑戦し、いろいろなことを体験し、いろいろなことを学びました。時には悲しくて苦しい時期を過ごしました。思い通りにならないこともありました。自分の気持ちを抑えられないこともありました。苦し過ぎて逃げたくなることもありました。そんな自分自身の気持ちが嫌になりました。けれど、絶対自分に負けたくありませんでした。自分に言い訳したくありませんでした。歯を食いしばって立ち向かう僕たちに、家族は心配して「焦らなくてもいい」と声をかけてくれました。今苦しいけど、いつか苦しいことが終わる日が来ると教えてくれました。折れそうな僕たちを後押しし



てくれる先生方がいました。そうして僕たちは嫌だったことや苦手だったことを、やってみたら意外に大丈夫だということを経験しました。続けてやってみることが大切ということも知りました。何より、周りの皆がいて、僕がいるということ、仲間と一緒に成長していくのだということ学びました。そんな中学校生活全てが今の僕たちを作っています。”

その彼が今年、“嫌な過去があっても、必ずしもマイナスに考えないでほしい”というようなことを最後にメッセージとして伝えてくれました。ただその彼も中学校2年生、ちょうど北京オリンピックの時に洛風中学校へやって来て、2年間を過ごしたわけですけども、最初はほとんど言葉を発しないし、文字を書かない生徒でした。うちの学校は毎日一言、今日一日のことを振り返る感想を書いたりとかするんですけども、そんなことを書くところは見ただことない。自分でもこの間言っていました、漢字が書くのが嫌だということらしいです。当然、答辞など自分で作って読む、ましてや高校で生徒会長として演説するみたいなことは、その当時は想像もできないような子どもでした。でもその彼の話を聞いて、在校生たちは自分も苦手なことがあるけども、その先輩が修学旅行で友だちと漫才をやったとか、これを失敗したので3年生を送る会の時にもう一度リベンジしてやったとか、秋パーティで司会をしてずいぶんアドリブで喋ったとか、そういう話を聞いて、自分たちも頑張ってみたいという気持ちになったと感想を残してくれました。今まで、何人か卒業生に本校に来て話をしてもらったのですが、なぜ洛風中学校やふれあいの杜に来るようになったかという点で共通するところは、不登校になってしばらくは、家の人ものすごくお互いしんどい思いをして、なんとか行かせようとかいろんなこと、しんどい思いをしていたけれど、ある時家の人かふと「もうちょっと疲れたし、仕方ない」とか「まあ一緒に考えよう」とかいう態度を見せてくれたこ

とのようです。さっき久米さんの話にもありましたけども、先日来た子もしんどい時に「ちょっと植物園にでも行こうか」とか、そういうふうに誘われて連れて行ってもらったり、いっしょに旅行に行ったりとか、そういうことで何かちょっとほっとして、それから自分も考え始めたっていうことでした。今いる在校生もその話を聞いて「僕もそうだった」みたいな感想を書いているので、いろんな子がいるのですが、どこかでちょっとそういう共通点もあるかなあというふうに思っています。

私は洛風中学校で8年間教頭と校長を務めておりますが、「どんな学校？」と聞かれると、いつも困ってしまいます。学校なので勉強も授業もするし、ちゃんと子どもたちには「学校へ来るように」と促します。一つ思うのは、保護者の方が「子どもが何とか洛風中学校に行ってくれたら！」という希望を持っておられることは、お話を伺っているとひしひしと分かるのですが、決してそれがしんどいことのゴールではなくて、そこから大変なことが始まるということなのです。子どもは実際にいろんな気持ちや傷つき、課題を持っているわけですから、それと登校した状態で向き合わなければいけないということです。洛風中学校は、授業が午前中2時間、午後2時間、生徒数も現在42名という小規模な学校ですので、のんびりしたイメージがあるかもしれませんが、1人1人がそういう課題を持っていますので、「この子は明日、死のうと考えたりはしないだろうか」「また学校へ来ないようになるんじゃないだろうか」「それにどう対応したらいいのか」ということを毎日先生が一生懸命考えなければならず、なかなか大変です。保護者も「また、お腹痛いとか言い出したらどうしたらいいですか」「また学校へ行かなくなったらどうしようか」という不安を訴えられますので、そこをどういうふうに共有していくかということを経々この8年間考えながら過ごしてきました。でもまだまだこうすればいいというようなノウハウみたいなものはなく、毎日それこそアドリブみたい

に1つ1つ考えていっている日々だと思います。

洛風中学校のカウンセラーを囲む会，親の会っていうのをしてまして，保護者が10名くらい，あるいは少なければ3，4名とかにカウンセラーと私も入らせてもらいまして，その気



持ちを共有するという場を設けています。先ほど「背中を押す」という話がありましたが，お母さんやお父さん方の間で「どういうふうに背中を押したらいいのか分からない」という共通の話がよく出ました。あるいは「本当に高校行ってこの子はやっていけるのだろうか」という話も共通して出ています。

長い目で見ると，子どもたちは案外この洛風中学校を土台にして，結構それぞれに踏ん張ってそれなりにやっていっていると思います。今，目の前には本当に心配な子が多いんですけども，ここをどうするか，今をどうするかというと，今一番この子たちが望んでいること，その子によってはずっと見守ることになるかもしれないし，ある子によっては背中を押すことになるかもしれないけれども，それぞれに大事なことを一緒に考えていくという，そういうことを大事にしながらやっています。

次に申し上げたいことは，「一喜一憂しない」ということです。最初の頃はたくさんの子が来たり，来られなかった子が来たりすると，喜んでいただけですが，それが必ずしもよいことでなく，無理して来ていたりすることがあるということ学びました。転校してきた当初は調子よく頑張ってくるんですけど，それがちょっと逆に心配だなあと思う目で見るとか，逆に夏休み明けとかにちょっと休み出したことは本来心配なんですけども，「あ，やっとなんか

と休むコツを覚えたな」くらいに思っただけでやるということですね。自分で休むことを主張できるようになると今みたいになりますので、休むことっていうのをよい意味と悪い意味の両方で考えていくことが、大事かなあと思っています。

最後にもう1点申し上げます。洛風中学校でも毎年3年生が9月に修学旅行に行きますが、そこへ行くか行かないかを考えるというのが非常に大変なことです。2泊3日というのはなかなか大変だなあと思っています。1泊ならなんとかなる子が多いですが、3年生の9月に2泊するという決定を自分でするということはそれぞれの子どもにとって非常に大変だと思います。我々は行くのも大事なことでだけれど、行かないという選択をすることも大事にするという姿勢で子どもに最後まで対応しています。

その修学旅行では、去年から徳島県へ行って、高知県との県境で鯉のたたき作りを体験するということをしているのですが、そこで指導してくださるIさんという方が非常に素敵なお方で、命の大切さなどの話を生徒にしてくださいます。今年は、ご自分も5歳の時にお父さんを亡くされていろんな苦勞をしてきたけども、「そういうしんどい思いをしていることの方がきっと将来君たちの役に立つよ。しんどい時には皆、一歩ちょっと前へ踏み出してみようと言われるかもしれないけども、その場で動かずに踏ん張っていることが大切。そういうことをしていたら、誰かちょっと手を差し伸べてくれる人がいるということを信じて。そのしんどい思いしたことは、君たちが親になった時にきっと役に立つよ」というような話をしてくれました。

去年、そのIさんに「おばちゃん英語話せるかー？」と突然尋ねた生徒がいました。Iさんは間髪いれずに「a little」という言葉をおっしゃったのですが、私はそれを非常に素敵だと思いました。なんでもちゃんとできないといけないと考えてしまいましたが、「a little」つまり「少しできる」という感覚ですが、この学校でなんで

も完璧にじゃなくて「a little」のような「少しはやったことあるよ」という感覚を身につけて、人と繋がっていく、自信を持って、人を信頼して「少しできるようになったよ」と思えるようなことを積み重ねて行って欲しいなあと思っています。

それに子どもたちの話を聞いていますと、さきほどの山本さんの話にもあったように、やっぱり自分で決めています。修学旅行でもそうですし、この洛風へ来ることも自分で決めています。卒業生も皆、なんらかの思いがあって一つの表現として不登校になったということは、共通しているところかなあというように思います。子どもたちは、洛風中学校で結構しっかり授業を受けて、朝から勉強したり、放課後も勉強したりと、勉強を頑張る姿があるわけですが、あわせて仲間と一緒に体験的なこととか人間らしい関わりを取り戻すこともしていると思います。

最後に、洛風中学校は特別な学校だというふうに思われがちですが、決してそうではなくて、洛風中学校に来ている子どもたちというのはどこの学校にでもいる子どもたちです。みんなかつてはそれぞれの学校にいて、いろんな事情があって自分で決めてここに来ているのですから。いろんな学校で不登校が多いとか少ないとか言われたりしていますが、不登校のことを考える上で大切なことは、不登校になる前の状態に戻すということではなくて、「この先一緒にどうしていくか」ということを一緒に考えていこうという感覚と、たくさんの眼でその子のことを見守っているかどうかということです。一般の学校でも不登校に関する委員会があると思いますが、もらさずその子どもたちのことを話題にして話し合っているかどうか、いろんな人がその子のことを考えているかどうかというのは、大切なことではないかなと思います。直接の関わりは別にして、全員の先生が全員の子どもたちのことを一緒に考えて「もうぼちぼち背中押したほうがいい」と言う先生もいれば「いや、もうちょっと待った方がいいのではないか」と言う先生もいるなかで、話し合い

ながら進んでいくということが大事かと思っております。そういうことを感じながら8年間洛風中学校を運営してきましたが、まだまだこれから変わっていくと思います。ありがとうございました。

**藤原氏**：ありがとうございました。よく言われていることでございますけれども、三人のお話に共通していたのは、登校するか欠席するかというような視点ではなくて、正に「ケースバイケース、それぞれの個人の顔」ということだと思います。つまり、いま現に“この子はどう生きていくのか”“この子とどう過ごしていくのか”というテーマだと思います。

もちろん、私たちは不登校を「問題行動」と捉えているわけです。そうしたなかで、不登校をした子どもあるいはなった子どもについて「そんなところにテーマがあるんじゃないよ」というお話を3人からいただきました。しかしやっぱり不登校は問題行動なので、我々関わる者にとったらやっぱり「不登校問題だ」と考えている「問題」というのが「問題」なんですね。問題とする理由の1つとしては、例えば「学校は義務教育なんだから行かなければならないんだ」ということがあります。実際に不登校の子どもに関わっている最中には、極端に言うと登校するかどうかは問題かどうかなんてどうでもいい話だというように感じますが、実際にはやっぱり問題は問題なんだということを現実社会を生きるテーマとして、きちんと考える必要がある。

3人のお話は極端に言えば、不登校の状態や体験を通して、「学校は本当に行かなければならない所なのかどうか」ということについて考えて、「学校は行くべき所だ」という結論になったというお話だったと思うのです。そうすると、「学校に行くのは義務教育だから」という説明以上の何かを見出していく必要があったのだと思います。「学校に行っていないと、生きていく力を備えていく上で困るんだよね」ということを子どもたちと一緒に考えていかなければ

ならないのです。学校で何をするかというと、勉強やいろいろあると思いますが、勉強するだけなら塾もあります。しかし、不登校の子どもたちは勉強とは別に最も肝心な何かを提供されていないと思うのです。それは仲間との人間関係です。久米さんのところがラッキーだったのは、子どもさんが外に行けないというわけではなかったところだと思いますね。しかし現実には、周りに一切かかわらなくなってしまうたり、結果としてそうなるようになってしまったりする不登校状態も多いと思います。

こうした点から考えると、やはり人格形成上、人はもつれ合って育たないと生きていく力を獲得することは難しいのではないかと、そのようなもつれあう場として学校があるのではないかと思います。不登校状態になって得にくくなることは、もちろん勉強とかいろいろなことがあります。やはり同級生や誰かと一緒に集団の中で自分を見ていくような機会が失われていくということが非常に大きいのではないかと。だからそういう意味で、学校というのは人間関係の場だと思います。先程、須崎先生から「自己決定」の話がありましたように、人間関係の場として考える時に選んで行く所というのは、塾やいろいろな所があります。しかし、私たちがもう一つ、世の中で人格形成していくところで非常に重要なのは、「選べない」人間関係の場だと思います。強制的というか自分で決めたわけではない人間関係、あるいは与えられた環境と場の中で育っていく体験をする場が学校という仕組みではないかと思います。義務教育の「義務」というのは、学校では同級生も先生も自分では選べないが、そういう選べない集団の中で過ごさなければならないということであり、そうしたところでこそ育まれる力が生きていく上で非常に重要なのではないのでしょうか。そして、その役割を今の社会の仕組みの中で担っているのは学校ではないかという気がします。サークルだったら自分で選んで選択すればいい話ですし、嫌なら辞めればすむことでしょう。むしろ私たちは、選択できない人間関係、環境

の中でどう生きるかという力を備えなければならない。こういう人間関係の場として学校を考えるのも重要な視点ではないかと思えます。そういうことをきちんと考えた上で、やっぱり学校に行かせたいという迫力がなければ子どもたちに関われないうすよね。このことも含めて、「どうしても子どもに学校へ行かせたいというのはなぜなんだ？」ということについて、ご自分の中で感じておられることがございましたら、お話を伺えますでしょうか。

**山本氏**：お子さんと面接している時に、お子さんの方から直接「なんで学校に行かないといけないの？」「なんで学校に行く必要があるの？」「休んでいたら駄目なの？」という言葉をよく聞きます。その中で何が正解かというのは難しいですし、その子にどういう言葉が響くかというのも難しく、すごく返答に困る自分がいます。学校に行けないとか何かができないということを認めてあげるといふことも大切なことだと申し上げたと思えますが、そういう私自身もやっぱり、吸収力の高い多感な時期に学校という集団の中で規律や人間関係、勉強、先生との関係性などを学んでいくことは心の成長に繋がっていくというように感じています。ですので、ちょっと言い方は悪いかもしれませんが、私自身も高校時代に学校に行けなかったということを後になってから意味付けができていくわけで、やはり今スクールカウンセラーとしてお子さんに関わっていく時には今の状態も認めつつも、でもやっぱり登校っていうところを目指すという観点はあるかなと思えます。またその子自身を受け入れるということに関してはスクールカウンセラーが、また学校に戻ってきて欲しいというメッセージを送るのは教職員の方々とそれぞれ役割分担をして、その子にいろんなメッセージを送り続けるということが大事かなと思えます。やはり学校という場は、子どもにとってすごく大切なところだと私自身は考えております。

**藤原氏**：学校に登校するってことは出席欠席という外見的な行動上



の不登校問題とは全然別に、生きていく力を備える上でやっぱり必要なんだということについてどんなふうに思いますか。久米さん。

**久米氏**：一番下の子が今でもまだ「今日学校でこんなことがあったの！」「先生とこんなこと話したの！」「〇〇ちゃんとかんなことするのよ！」という話を毎日報告してくれるんです。僕は、学校に子どもを行かせることが親の仕事というか使命だと思います。その子どもに対して勉強を教えたり、人間関係の力を育てたりしてくれるのが学校の役目だと思います。だから、不登校の子どもたちを学校に連れて行くのは学校の役目ではないと思うんです。学校を親と子どもとが話をする一つのツールと考えればよいと思います。今日学校であったことに対して子どもが親に報告する、それを親が聞くことによってまた明日から何か新しいものを見つけようということになるのではないのでしょうか。学校であったことをたくさん親が聞いてあげられるような環境や、また明日学校へ行って楽しい話をお父さんやお母さんにしようっていう子どもの気持ちがあれば、学校が楽しくなってくるんじゃないかなというように思います。

**藤原氏**：やっぱり、学校は親子の話題を生み出す場でもあるんですね。逆に、学校の先生が子どもと一緒に家庭の話題を生み出すことがあってもいいのではないかという感じもするんです。洛風の子もたちというのは、先生に家族のことを話すことはあんまりないんですか？

**須崎氏**：割と話していると思います。逆に、話をしすぎないように言わなければならないこともあるくらいです。先生方も話を丁寧に聞いてくれていると思いますし、家でもよく話している子もいるようには聞いています。男子、女子の差など、子どもによって対応は違うと思いますけども、少し腰を据えて子どもと話をするというよ

うな場面が学校には必要だと思います。

僕も学校はやっぱりものすごく子どもたちにとって大事なものだというように思います。洛風中学校ができた平成16年の頃には、我々もそうした学校の経験がないなかで、校則もなく服装も自由という状態でした。そのうち、いじめや嫌がらせとかも起こってきました。その時一番立場のしんどい子どもが「先生にちゃんと指導してほしいし、もうちょっと厳しくしてもらいたい」と声を上げてくれたのです。そこで「洛風をより良くする委員会」という生徒会のような組織を作って、子どもたちと一緒に何が大事なのか考えながら学校を運営してきました。平成19年、20年くらいでやっと落ち着いたように思います。

子どもたちを見ていると、嫌なことはいろいろあると思うんですけど、学校という場で同年代や先輩後輩など年齢の近い若者でしか共有できないものをとっても求めていると思います。そこでいろいろトラブルもありますが、それをどう乗り越えていくかということを非常に大事にしています。発達に課題を抱えている子もいますが、「あんばい」とか「折り合いをつける」ということを一生懸命一緒に考えていきます。最初は友達がほしいのでちょっと我慢しているけれど、友だちになれるかなと思ったらその子にブワーッと迫っていったり、それでまた引かれたり、ということがあります。その調整をどう折り合いをつけながらやっていくかということが学べるのはやはり学校だと思いますし、自分が嫌いな勉強をしたり、あるいは面白いことにも出会えたりと、世間を広く経験するということが学校ならではの経験だと思うので、やはり学校は必要だと思います。その中で、自分のことだけではなくて「調整」をしてやっていく力を身につけていくことが大切です。われわれがずっと「学校はこうだから、これに合わせる」みたいな姿勢だけだと、子どもはしんどいんじゃないかと思います。今の子どもたちに必要なことは何だろうということ、一緒に考えるという感覚を失った学校は、必要じ

やないと思います。やはり一緒に考えられる環境があつてはじめて子どもたちも生きてくるのではないかと考えています。

**藤原氏**：東北でカキ養殖をされている H さんという方が代表をされている「森は海の恋人」という団体があります。この団体では、川の水をきれいに保たないと海の植物プランクトンがなくなってカキの生産ができなくなるということから、平成元年ぐらいから漁師さんたちが山に木を植える運動をずっとやっているのです。今度国連でも発表するそうです。この間京都でシンポジウムがあつた際にその方に伺つたのですけれども、そういう運動をやつていこうと考えて、森の専門家、川の専門家、それから海の専門家が「やりましょう！」となつても、実際にはそれぞれの専門家が連携するということは難しいことだつたそうです。でも、この連携が成功した理由は何なのかというと、やっぱり“カキ”が繋いだということ。つまり、自然が人間を繋いだということの典型例だと思ひました。

不登校の子どもへの支援でも、ネットワークとか、あるいは世の中全体で考えましようとか、家庭と地域と学校が連携してやりましようということは言われていますが、同様になかなか難しいことです。しかし「繋がり」つまり支援を受ける子どもにとってどうだろうという子ども中心の視点の重要さを、今日のパネリストの共通項として語っていただけたのではないかと思ひます。そうした時に、私たち自身がそれぞれ専門性や立場を持つことは結構なことなんだけれど、まず大前提として子どものためにどう繋がるかということをご一緒に考えていただくことが非常に重要なのだと思ひます。例えば、親は親の専門家としてやつていただくということだし、教員は教員としての専門家、スクールカウンセラーはスクールカウンセラー、地域の人には地域の専門家としてやつていく。何を言いたいかというと、例えば親が先生の代わりをするとかではなく親にしかできないことをする、つまり自分ができないことを一生懸命自覚することが専門性を発揮することだというように思ひます。この

辺のところはしっかりしてくると、親は「総合的に子どもを見るために私は先生にはできないことをしっかりとやっているのだろうか」と考えながら一生懸命頑張ってみるということになります。あるいは「スクールカウンセラーや担任が子どもには聞けないことを私は一生懸命聞いているのだろうか」という意識を出発点にしながら、自分が子どもにとって個性ある有用な親・大人であるかどうかを考えていくことになります。将来、子どもに「いろんな人に出会って、僕は大きくなった」と言ってもらえるような大人が真に連携する「繋がり」を大事にしていきたいと思います。

ちょうど京都では、「子どもを共に育む京都市民憲章」もできました。それを推進するための条例を制定しなければならないくらい、親も地域の大人も子どものために何ができているのかを自らに問い直さなければならない時代がきています。お年寄りたちにとっての無縁社会ということが言われていますが、「子どもの無縁社会」という言葉も生まれてきているくらいに、ネットワークにさえ入らない子どもたちが日本の中にいるという事実があります。こういう世の中で本当に人間が人間と繋がることさえできない、だからせめて繋がろう、しかしせつかく繋げたのにそこでいじめが起こり、人と「もう付き合わない」ということが生産されていく。こういうことを一つでも克服していく機会として、不登校の子どもたちから学ぶということを考えていかなければならないと思うのです。それを考えるスパンは、学齢期の間に学校復帰するとかいう短期的な話ではなくて、やっぱり一生かかる課題ですよ。見かけ上よくなるとかよくなるのかという話ではありません。

今日、皆さん方と共に一步深く考えたいことは、私が持っているケースでもやっぱり「30歳になって、まだ不登校していて、人と付き合えないんですよ」とひきこもっている“子どもたち”がいるんですね。もう卒業しているのに。しかし、心の中の不登校というのをやっぱり依然として生きている若者たちもいるんだというこ

とです。もう客観的には学校に行く年代じゃないし、学校を卒業しているのに、だけど心の中での不登校ということが続けている。「あなたは何がしたいのか？」と言ったら「通信制でもどこでもいいけど、学校にもう一回行く」と。こういう願いを持っている若者たちも結構います。学校というのは、やっぱり我々が想像しているより非常に大きい人生の意味を持っているなあと、今日も改めてすごく感じた次第です。

登校というのは、やっぱり登る感じですよ。しかし、下を向いて下校の気分で登校している子どももいるかもしれませんよね。あるいじめを受けた子どもから「学校に行くんだけど、下校するような感じで登校する感じがします」と聞いたことがあります。私たちはやはり子どもが前向きに登校する感じで学校を作っていきたいと願っていると思います。

しかし同時に、私たちは子どもが明るく元気でどんどん成長していくことだけをよしとして、よい人生というのはお日様のような輝きに満ちたものばかりだとするような時代を作ってきているのではないのでしょうか。そうではなくて、お月様のあの輝きということも本当に素晴らしい輝きであるということをお忘れなさいたいと思います。「お月様の輝きも美しい輝きなんだ」ということを不登校の子どもは教えてくれているのではないかと思います。不登校の子どもたちは、不登校を克服した後もお日様のような明るい輝きを示すということはそう多くないかもしれません。むしろ大人しいし静かだし、本を読んだり、月を愛でながら過ごすような感じの子どもが多いような感じがします。それは決して世の中の害になっているわけではありません。そういう生き方を十分していける世の中、社会なんだということを私たちはもっともっと、希望の中に、輝きの中に取り戻していきたいなあとというようなことを思って、終わらせていただきます。ありがとうございました。



# 分科会

第 1 分科会「一から学び考える不登校」

第 2 分科会「精神医学の観点から見た不登校」

第 3 分科会「臨床心理学の観点から見た不登校」

第 4 分科会「フリースクールから見た不登校」

第 5 分科会「発達障害を支援する立場から見た不登校」

第 6 分科会「若者の『自立』を支援する立場から見た不登校」

## 第1分科会 「一から学び考える不登校」

講師：桶谷 守氏（京都教育大学教授）

岩井 秀世氏（京都市スクールカウンセラー）

不登校は、一つの要因だけではなく、様々な要因が絡み合って引き起こされることが多いと考えられています。

この分科会では、教師と親との視点の違いや、不登校の子どもが変化する要因などについて、議論を深めました。また、社会・家庭の変化や発達障害など、子どもたちを取り巻く今日的な課題にも触れながら、参加者の皆さまとともに不登校について多面的に考えました。

### 【フロアとのやりとり】

**Q1** 不登校の原因は探らない方が良いのか？

**A1** 原因探しではなく、子どものしんどさを知るためや、今後の対応を考えるために、要因を正確に把握することは必要。できるだけ専門家と相談して考えてほしい。

**Q2** 不登校の子に対して、強い刺激は与えたくないが、背中を押してあげたい。どうすればよいか？

**A2** 背中を押す時は、子どものタイミングをよく見て、焦らない、慌てない、大人のペースを押し付けないことが大切。大人は「早く解決を」と思うが、心の成長には時間がかかる。

**Q3** 我が子が不登校。早く復帰を願っているが…。

**A3** 「復帰」や「早く改善」してほしい気持ちになられると思う。子どもが安心すること、元気を取り戻すことが必要。時期に応じた対応があるので、専門家と子どもの状態を検討しながら、対応の工夫してほしい。

### 【参加者の感想】

- 保護者、学校からの立場、生の声が聞けてよかったです。カウンセラーさんの具体的な支援も聞けてよかった。
- 地域も含めた支え合いの大切さをそれぞれの立場の人が認識されていることがわかりました。私も臨床心理士として地域での支え手になりたいと思っています。



## 第2分科会 「精神医学の観点から見た不登校」

講師：森 孝宏氏（京都教育大学保健管理センター教授）

「メンタライゼーション」とは、自分や他者、またその関係性を理解するところの働きです。不登校の背景には、この「メンタライゼーション」能力の未発達が潜んでいると考えられます。

この分科会では、「メンタライゼーション」についての理解を深めるとともに、様々なタイプの不登校事例に基づき参加者同志でのディスカッションを行いました。

### 【フロアとのやりとり】

**Q1** 不登校問題は医療とどう繋がれば良いのか？

**A1** 子どもが不安を訴えれば、医療機関は第一選択肢として薬を与えるだろうが、大切なのは、「自分のところ・周りのところ・関係性」をどう理解していくかということ。そのためには、様々な立場の支援者が必要。

**Q2** 母親として、子どもと日々どう関わり、支援するかが切実で、とてもエネルギーがいります。

**A2** 不登校問題の解決には幅広い支援者の存在が必要。うまく連携するためには相手任せではなく、関係機関を上手に活用することが大切。

### 【参加者の感想】

- メンタライゼーションの大切さに改めて、勉強意欲がわいた。
- 色々な事例を知り、また先生の言葉の中のキーセンテンス、捉え方など勉強になりました。来年も参加したいです。

## 第3分科会「臨床心理学の観点から見た不登校」

講師：濱野 清志氏（京都文教大学心理臨床センター教授）

不登校は心の問題から生じているだけでなく、心と身体とのつながりが希薄なことから生じている場合もあります。また、不登校の子どもを支援するためには、「今、ここ」の状態を味わい、「今、ここ」を生きるという姿勢が大切です。

この分科会では、参加者の皆様に「自分の呼吸を観察しましょう」「三線描画法」などのワークを通じ、「心と体のつながり」や「今、ここ」を生きることを実感していただきました。また、他者の反応から自己を振り返る体験をしていただきました。さらに、全人的な関わりとしての「心と身体をつながり」を軸に不登校について参加者の皆様と一緒に考えました。

### 【フロアとのやりとり】

**Q1** 「今の自分を味あうこと」と「客観的に見ること」の違いは？

**A1** 前者は受容的、ほどよく暖かく楽しみながら見る。後者は批判的で冷たい。

**Q2** 今の自分を味わうということと、リラクゼーションとは関係ある？

**A2** ある。「身体が落ち着く方法を探っていく」という点ではほとんど近い。「メディテーション」では、今身体に起こっていることを評価なしに観察し言葉にしていく。そうすると自分を見る目がふっと生まれる。それを臨床心理学に応用しようとする動きが「マインドフルネス」。ストレスに巻き込まれた時に「押し付けられて嫌だ」と思うのではなく、「よくがんばっている自分がある」と思えると隙間ができて「休もう」と思える。

**Q3** 学校に行きたくない時に痛みを訴える子について、本当に痛みがあるのだろうか？

**A3** 本当に痛みがあるのかは分からないが、何かのサインと受け止めることが必要。

### 【参加者の感想】

○心と体でズレがある中，“今ここ”で自分が感じていることに目を向けていくことは本当に必要だなあと感じました。

○ワークを通して、自分の心と身体と向き合うことが出来ました。今ここを大切にしていけることを学びました。

## 第4分科会「フリースクールから見た不登校」

講師：鷹羽 良男氏（フリースクール ほっとハウス代表）

フリースクール「ほっとハウス」は、公教育の枠組みとは違った形で、不登校の子どもたちの活動の場を提供しています。ここでは、日々、子どもたちが新たな体験や人間関係を通じて力強く成長していく姿に出会います。

この分科会では、「仲間意識の育ち」「自己決断の育ち」「興味関心の助長」など、「ほっとハウス」が大切にしている子どもたちへの働きかけについて解説し、事例を交えながら不登校の子どもたちの持つ「成長する力」を大人がどう引き出すかなどについて参加者の皆様とともに考えました。

### 【フロアとのやりとり】

**Q1** ほっとハウスは何歳まで受け入れるのか？

**A1** 基本的には20歳まで。最近は小学生が増えて年齢構成が様々。

**Q2** 訪問ではどれぐらいで復帰できたか？

**A2** 早くて半年。訪問は変化が弱い。子供同士が影響しあう方が変化は出やすい。

**Q3** フリースクールと学校との連携は？

**A3** 学校によって異なるが、メールでのやり取りなど毎週連絡を取り合ったり、学校の先生の子どもたちの野球の試合を見に来てもらったりしている。

### 【参加者の感想】

○ フリースクールは通過点というのがとても印象的でした。小中学校の9年間で立ち止まってしまう子には考える時間、自分で自分のことを決めるということが大事なんだという新たな視点が増えたように思います。

○ 子どもとの関わりの中で大切にすべきこと、とても勉強になりました。最後まで興味深く聞かせていただきました。

## 第5分科会「発達障害を支援する立場から見た不登校」

講師：村松 陽子氏

(京都市発達障害者支援センター「かがやき」センター長)

現在の不登校の問題において発達障害という視点は、欠かせないものとなってきています。

この分科会では、自閉症スペクトラムを中心に、ADHD、LD等の発達障害についての基礎的な講義を行った上で、発達障害の子どもが学校に行けなくなる原因として「集団行動の困難」「学習の困難」「感覚過敏」「対人関係」が考えられることを解説しました。また、子どもの特性に合わせたどのような支援が必要なのかについて、フロアとのディスカッションを交えながら理解を深めました。

### 【フロアとのやりとり】

**Q1** パソコン依存の高機能自閉症の子から、パソコンを取り上げるべきか？

**A1** パソコンにのめりこむのは、おそらくパソコン以外のことが思うようにいっていないから。パソコン周辺から少しずつ興味や楽しみを広げていくように関わるとよいと思われる。

**Q2** 発達障害の子どもを持つ親やそれ以外の家族に対する支援がほしい。

**A2** 親が気軽に相談できる場所としては、発達相談員の制度がある。また、「不登校の子どもたちのためのネットワークブック」(\*)にも様々な情報がある。学校も大切だが学校だけで子どもが変わるわけではない。親や家族への支援は本当に大切だと思う。

(\*) 京都市教育委員会ホームページに掲載

URL <<http://www.city.kyoto.lg.jp/kyoiku/page/0000009046.html>>

### 【参加者の感想】

○ まずは家庭での生活、家族との関係をもう一度考えたいなと思いました。色々な話が聞けてよかったです。

○ 発達障害について、丁寧に説明していただけたので、理解が深まりました。不登校につながる特性や、支援の例について大変勉強になりました。よかったです。

## 第6分科会 「若者の“自立”を支援する立場から見た不登校」

講師：水野 篤夫氏（京都市ユースサービス協会事業部長）

京都市ユースサービス協会では、「青少年活動センター」「子ども・若者総合相談窓口」「京都若者サポートステーション」などを運営し、若者の社会参加や就労支援、人間関係づくりなどに取り組んでいます。

この分科会では、過去に不登校やひきこもりを経験した若者がどのように自立・就労の道を歩んでいくのか、また、そのために必要な支援とはいかなるものか、京都市ユースサービス協会での取り組みについて触れながら参加者の皆様とともに考えていきました。

### 【フロアとのやりとり】

**Q1** 子ども・若者総合相談窓口の支援を受けられる年齢や、参加費は？

**A1** 30歳代まで。相談は無料。青少年活動センターのロビーワークなどで、コピー代などの実費は必要。

**Q2** どのようなケースがうまくいき、どのようなケースがうまくいかないのか？

**A2** ケースによるが、本人が来談しない、家族に相談の意思や関わる気のないケースはとても難しい。

**Q3** 子ども・若者支援室ではどれくらいの期間で支援していくのか？

**A3** 短いケースもあるが、長い場合2年にわたるものもある。本人と相談しながら、必要があれば他の機関（NPO等民間団体も含む）につなげていく。本人の目標を再設定していき、再設定の必要がなくなれば支援を卒業する。

### 【参加者の感想】

○ ユースサービスと青少年活動の実際の様子がよくわかった。今後の電話相談やカウンセリング場面で情報として、お伝えできることも可能性が見えてきました。

○ 青少年活動センターの前は何度か通ったことがありながら、具体的にどういう施設なのかがわからなかったのですが、これだけの支援を行われているということが分かり、大変勉強になりました。もっと社会に広まればいいと思います。

## **参考資料**

**不登校フォーラムの歩み**

## 不登校フォーラムの歩み

じと

### 第1回 「～人間として、親として～」

日時：平成13年2月17日(土) 13時30分～ (会場：西陣織会館)

- 第1部 講演 講師 藤原 勝紀 氏 (京都大学大学院教授)  
第2部 シンポジウム コーディネーター 藤原 勝紀 氏 (京都大学大学院教授)  
パネリスト 小林 哲郎 氏 (京都市スクールカウンセラー)  
中尾 安次 氏 (京都市桃陽病院院長)  
宮本 修 氏 (京都市教育委員会生徒指導課長)

### 第2回 「～心をつなぐネットワーク 考えよう支援体制～」

日時：平成13年10月13日(土) 13時30分～ (会場：京都府中小企業会館)

- 第1部 分科会  
A・B 不登校児童・生徒の保護者対象カウンセラーを囲む会  
内田 利広 氏 (京都市スクールカウンセラー)・松木 繁 氏 (京都市スクールカウンセラー)  
C・D 相談担当者の研修会  
藤原 勝紀 氏 (京都大学大学院教授)・皆藤 章 氏 (京都大学大学院助教授)  
第2部 シンポジウム コーディネーター 藤原 勝紀 氏 (京都大学大学院教授)  
パネリスト 皆藤 章 氏 (京都大学大学院助教授)  
稲葉 章江 氏 (京都市立光徳小学校養護教諭)  
四方 実興子氏 (京都市立嘉楽中学校「ゆうの会」保護者)

### 第3回 「～広げよう、やさしさと安心の支援ネット～」

日時：平成14年10月5日(土) 11時00分～ (会場：京都アスニー)

- 第1部 不登校相談窓口案内  
永松記念教育センター相談課・ふれあいの杜・児童相談所・青葉寮・桃陽養護学校・  
南青少年活動センター・少年サポートセンター・子どもの人権110番・子ども支援  
センター・子どもの人権専門委員会・こころの健康増進センター  
第2部 シンポジウム コーディネーター 藤原 勝紀 氏 (京都大学大学院教授)  
パネリスト 安原 俊介 氏 (元ふれあいの杜アシスタント)  
松木 繁 氏 (松木心理研究所所長)  
太田 勝 氏 (京都市立桃山中学校教諭)

### 第4回 「～届けよう、未来へのメッセージ～」

日時：平成15年10月2日(木) 14時00分～ (会場：こどもパトナ)

- シンポジウム コーディネーター 藤原 勝紀 氏 (京都大学大学院教授)  
パネリスト 宇都宮 誠 氏 (生野学園 学園長)  
竹村 洋子 氏 (京都市スクールカウンセラー)  
山口 幸子 氏 (保護者)

### 第5回 「不登校はいけないことですか？」

日時：平成17年2月5日(土) 14時00分～ (会場：こどもパトナ)

- 講演会 講師 藤原 勝紀 氏 (京都大学大学院教授)  
グループ討論会

**第6回 「不登校の子どもたちを“まなざす” ～私たちの見方・考え方の再点検～**

日時：平成17年7月19日(火) 13時30分～ (会場：こどもパトナ)

グループ討論会

パネルディスカッション コーディネーター 藤原 勝紀 氏 (京都大学大学院教授)  
パネリスト 中村 道彦 氏 (京都教育大学保健管理センター所長)  
内田 利広 氏 (京都府臨床心理士会 SG 部会担当理事)  
河内 正明 氏 (京都市立洛風中学校長)  
矢崎 夏枝 氏 (「ふれあいの杜」アシスタント)

**第7回 「登校へのシグナル ～新たな視点でまなざす～」**

日時：平成18年12月23日(土) 13時30分～ (会場：こどもパトナ)

講演会 講師 藤原 勝紀 氏 (京都大学大学院教授)  
グループ討論会

**第8回 「不登校子どもたちの『登校どころ』VS『不登校どころ』 ～子どもたちの登校しようとする気持ちに寄り添う～」**

日時：平成19年12月16日(土) 13時30分～ (会場：こどもパトナ)

講演会 講師 藤原 勝紀 氏 (京都大学大学院教授)  
グループ討論会 <1><2>

**第9回 「『登校どころを育むために』 ～『不登校どころ』に負けるな～」**

日時：平成21年1月18日(日) 13時30分～ (会場：こどもパトナ)

講演会 講師 藤原 勝紀 氏 (京都大学名誉教授)  
シンポジウム コーディネーター 藤原 勝紀 氏 (京都大学名誉教授)  
パネリスト 四方 有紀 氏 (京都市小学校PTA連絡協議会役員)  
鷹羽 良男 氏 (フリースクール ほっとハウス代表)  
徳田 仁子 氏 (京都市スクールカウンセラー)  
小田 正明 氏 (京都市立洛風中学校長)

**第10回 「『登校どころ』を育むつながり ～子どもとつながり、社会とつながる～」**

日時：平成22年1月24日(日) 10時00分～ (会場：こどもパトナ)

第1部 講演会 講師 藤原 勝紀 氏 (京都大学名誉教授)

第2部 内容別分科会

第1分科会 講師 中村 道彦 氏 (京都教育大学保健管理センター所長)  
第2分科会 講師 濱野 清志 氏 (京都文教大学心理臨床センターセンター長)  
第3分科会 講師 鷹羽 良男 氏 (フリースクール ほっとハウス代表)  
第4分科会 講師 幸田 有史 氏 (京都市発達障害者支援センター「かがやき」センター長)  
第5分科会 講師 徳田 仁子 氏 (京都市スクールカウンセラー)  
第6分科会 講師 坂野 晴男 氏 (京都市教育相談総合センター ふれあいの杜館長)  
第7分科会 講師 藤本 範子 氏 (京都市教育相談総合センター カウンセリングセンター主任指導主事・カウンセラー)



**第11回** 「つないでいく『登校ごころ』 ～登校支援のこれまで、これから～」

日時：平成23年1月23日(日) 10時00分～ (会場：こどもバトナ)

第1部 講演会・フロアとの対話 講師 藤原 勝紀 氏 (京都大学名誉教授)  
桶谷 守 氏 (京都市教育相談総合センター所長)

第2部 内容別分科会

第1分科会 講師 中村 道彦 氏 (京都教育大学保健管理センター所長)  
第2分科会 講師 濱野 清志 氏 (京都文教大学心理臨床センター教授)  
第3分科会 講師 水野 篤夫 氏 (京都市ユースサービス協会事業部長)  
第4分科会 講師 村松 陽子 氏 (京都市発達障害者支援センター「かがやき」センター長)  
第5分科会 講師 岩井 秀世 氏 (京都市スクールカウンセラー)  
第6分科会 講師 山谷 清志 氏 (京都市立洛風中学校卒業生保護者)  
須崎 貫 氏 (京都市立洛風中学校長)

**第12回** 「『登校ごころ』を語り合う ～それぞれの登校支援のかさなり～」

日時：平成24年1月22日(日) 10時00分～ (会場：こどもバトナ)

第1部 シンポジウム 基調講演 藤原 勝紀 氏 (京都大学名誉教授)  
パネリスト 野田 正人 氏 (立命館大学教授)  
山谷 清志 氏 (京都市立洛風中学校卒業生保護者)  
柴原 弘志 氏 (京都市教育相談総合センター所長)

第2部 内容別分科会

第1分科会 講師 森 孝宏 氏 (京都教育大学保健管理センター教授)  
第2分科会 講師 濱野 清志 氏 (京都文教大学心理臨床センター教授)  
第3分科会 講師 鷹羽 良男 氏 (フリースクール ほっとハウス代表)  
第4分科会 講師 村松 陽子 氏 (京都市発達障害者支援センター「かがやき」センター長)  
第5分科会 講師 水野 篤夫 氏 (京都市ユースサービス協会事業部長)  
第6分科会 講師 岩井 秀世 氏 (京都市スクールカウンセラー)

**第13回** 「『登校ごころ』を育む支援 ～登校支援を受ける立場から感じること～」

日時：平成24年11月4日(日) 10時00分～ (会場：こどもバトナ)

第1部 パネルディスカッション コーディネーター：藤原 勝紀 氏 (京都大学名誉教授)  
パネリスト：山本 輝栄 氏 (京都府臨床心理士会)  
久米 功一 氏 (京都市立中学校PTA連絡協議会会長)  
須崎 貫 氏 (京都市立洛風中学校長)

第2部 内容別分科会

第1分科会 講師 桶谷 守 氏 (京都教育大学教授)  
岩井 秀世 氏 (京都市スクールカウンセラー スーパーバイザー)  
第2分科会 講師 森 孝宏 氏 (京都教育大学保健管理センター教授)  
第3分科会 講師 濱野 清志 氏 (京都文教大学心理臨床センター教授)  
第4分科会 講師 鷹羽 良男 氏 (フリースクール ほっとハウス代表)  
第5分科会 講師 村松 陽子 氏 (京都市発達障害者支援センター「かがやき」センター長)  
第6分科会 講師 水野 篤夫 氏 (京都市ユースサービス協会事業部長)

# 京都市教育相談総合センター（こどもパトナ） “こどもパトナって？”

こどもパトナは、不登校をはじめとする、子どもたちの不安や悩み、保護者の心配や気がかりの相談に応じ、自立を促す効果的な支援を行うため、「教育相談」と「生徒指導」に係る部門を集約するとともに、不登校の子どもたちの活動の場である「ふれあいの杜」を充実させ、これらを一体化した全国初の専門機関です。



## カウンセリングセンターにおける来所相談 ※事前予約制 TEL075-254-1108

心のケアを要すると思われる気がかりな点、不登校・いじめや友人関係、性格や行動、学習や学校生活のことなど、教育上の様々な問題や、保護者の子育ての不安について、教育・心理専門のカウンセラーが直接お会いして相談に応じます。

相談時間：月～金曜日（第2・4水曜日以外）10：00～21：00 土曜日 9：00～17：00  
（第2・4水曜日、祝日、年末年始は休み）

対象：京都市内の小学生から高校生までの児童生徒及び保護者の方

## こども相談総合案内（電話ガイド） TEL075-254-8107

現在、子どもについて相談のできる施設や機関が教育、福祉、医療その他の領域で数多く活動しています。どのような相談先を選べばよいのか迷ったときにはまずお電話ください。お話をうかがい、内容に応じて適切な相談機関を案内（ガイド）します。

相談時間：月～金曜日（第2・4水曜日以外）10：00～21：00  
第2・4水曜日、土日曜日 10：00～17：00 （祝日、年末年始は休み）

## 日曜不登校相談 ※事前予約制、当日受付も可 TEL075-254-8107

「最近学校へ行くのを渋りだした」など、不登校についての不安や気がかりがあるとき、お気軽にご相談ください。相談員がお話をうかがいアドバイスします。

相談時間：日曜日 10：00～17：00 （祝日、年末年始は休み）

対象：京都市内の小学生から高校生までの児童生徒及び保護者の方

## ふれあいの杜 ※入級を希望される方は、まず在籍校と相談してください。

学校生活や家庭生活等で不安や緊張が高く、登校したくてもできなかったり、人間関係が原因で不登校が長期化した子どもたちを対象とする活動の場です。個別カウンセリング、小集団体験活動、学習活動を通して、子どもたちが新たな人間関係を築くなかで、信頼感や自らの存在感を感じ、新たな生活への意欲を高めていきます。

対象：京都市立小学校4年生から中学校3年生までの児童・生徒で、体験入級を経て入級が適切と判断された児童・生徒

〒604-8184  
京都市中京区姉小路通東洞院東入養華院前町 706-3  
TEL 075-254-7900（代表）  
FAX 075-254-7901



## 子どもを共に育む京都市民憲章

～子どもたちの今と未来のため、人と人の絆を結び、  
共に生きるうえでの行動規範としての市民憲章～

わたくしたちのまち京都には、子どもを社会の宝として、愛し、慈しみ、将来を託してきた、人づくりの伝統があります。

そうした伝統を受け継ぎ、人と自然が調和し、命のつながりを大切にして、子どもを健やかで心豊かに育む社会を築くことは、京都市民の使命です。

大人は、子どもの可能性を信じ、自ら育つ力を大切にして、子どもを見守り、褒め、時には叱り、共に成長していくことが求められます。そして、子どもを取り巻く状況を常に見つめ、命と健やかな育ちを脅かすものに対して、毅然とした態度で臨む必要があります。

わたくしたちは、子どもたちの今と未来のため、家庭、地域、学校、企業、行政など社会のあらゆる場で、人と人の絆を結び、共に生きる上での行動規範として市民憲章を定めます。

### 子どもを共に育む京都市民憲章



わたくしたちは、

- 1 子どもの存在を尊重し、かけがえのない命を守ります。
- 1 子どもから信頼され、模範となる行動に努めます。
- 1 子どもを育む喜びを感じ、親も育ち学べる取組を進めます。
- 1 子どもが安らぎ育つ、家庭の生活習慣と家族の絆を大切にします。
- 1 子どもを見守り、人と人が支え合う地域のつながりを広げます。
- 1 子どもを育む自然の恵みを大切にし、社会の環境づくりを優先します。

平成19年2月 5日(育児ニコニコ笑顔の日)制定  
3月13日 京都市会が憲章推進を決議

平成23年4月、憲章の実践を推進する条例がスタート。  
～実践の取組が進行中～

## 京都市不登校の子ども支援サイト

このサイトでは、京都市在住の不登校に悩まれている子どもやそのご家族の方に、教育相談総合センター（こどもパトナ）をはじめ、様々な相談機関等に関する情報をお知らせし、お一人おひとりに合った適切な支援が受けられることを目的として開設しています。

また、学校の先生や相談機関の方々に他の機関を知っていただき、草の根的なネットワークの構築を図ることを目指しています。

○ サイトURL : <http://www.edu.city.kyoto.jp/seitoshido/>

不登校の子ども  
支援サイト



平成24年度

## 不登校フォーラム 記録集

平成 25 年 10 月

京都市児童生徒登校支援連携協議会

京都市教育委員会

〔問合せ〕京都市教育委員会指導部生徒指導課

〒604-8184 京都市中京区姉小路通東洞院東入曇華院前町 706-3

(電話 075 - 213 - 5622 fax 075 - 213 - 5237)

—— 京都市児童生徒登校支援連携協議会 ——

児童生徒の不登校等の問題に対して学校・保護者・関係機関等が集い、将来的な社会的自立に向けた連携のあり方や取組を協議する会。平成 11 年 12 月設置（設置時の名称は「京都市不登校児童・生徒支援連絡協議会」）。

